

主 題 4技能統合型学習活動へと
発展させる指導の工夫
副 題 ～原稿なしで Show&Tell を楽しむ
生徒を育成するには～
学校名 掛川市立栄川中学校
役職・氏名 教諭・柳瀬昭夫

1 はじめに

平成20年3月、中学校学習指導要領が告示され、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に育成することの必要性が強調されている。また、目標においても以下のように、最後に4技能についての記述がなされ、最重要事項であることを強調している。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

しかし一方で、「ある文法や構文を学習した直後のドリルではほぼ満足できるレベルにあると思われるが、テーマや場面を与えられると、どのような文法や構文を使ったらよいのか混乱が生じるようである」

（『すぐれた英語授業実践』p.140：大阪府立東寝屋川高等学校・鶴岡重雄）といった指摘がある。現行の教科書シラバスは細分化されており、各単元で様々な言語活動が行えるように工夫されているが、それだけでは発信型のコミュニケーション活動を実践するには不十分ではないかと考える。生徒が4技能を総合的に活用して活動に取り組めるようにするには、生徒の実態から具体的な手立てをうつことが必要と考える。

そこで本校英語科では、平成20年度より、スピーチやディスカッション、プレゼンテーションなど、4技能の総合的な活用を前提とした活動を単元のまとめとなる統合的学習活動として取り入れるために、生徒の実態を見極め、具体的な手立てを打ってきた。これらの活動は、新学習指導要領で新たにうたわれた重要課題に沿ったものであり、これからの中学校英語の指導の方向性にマッチしていると考える。

2 主題設定の理由

発信型コミュニケーション活動を行う時の、生徒の実態から見られた課題は以下の通りであった。

【課題①】聴き手がお客様となっていることが多く、

Q&Aをするなどのインタラクティブな活動になっていない。

【課題②】生徒はあらかじめ原稿を作成し、それを発表（音読）するだけになっていることが多い。しかも聴き手はお客様化しているため、一方的な発信になりやすく、聴き手にとって内容がどうであるか、わかりやすい英文であるか、等の視点に欠ける発表が多い。

【課題③】仮に聴き手から質問をされても、やりとりに慣れていないため、発表者がうまく応答できないことが多い。

【課題④】活動の事後のふり返り等で、自分のうまく言えなかつたことなど表現や文法に関して、できなかつたことばかりに目が向きがちである。

【課題⑤】ふり返りの中で態度などに関する課題を発見し、「次は〇〇のようにやりたい」と考えることはできても、期間があくのでまた同じ失敗を繰り返してしまうことが多い。そのため、いつも「自分の番を終わらせる」ことが目的となっていて、高い達成感を感じる生徒が少ない。

活動の準備のためにある程度の時間を費やし、できるだけスムーズに発表ができるように配慮して活動をおこなったにもかかわらず、「本当にこれらの活動は生徒にとって有益だったのか?」「この活動を通して、生徒の何が育ったのか?」がはっきりしないままであった。そこで、上記の課題を乗り越えるための具体的な方策を立てることで、生徒にとって有益な発信型のコミュニケーション活動となると考えた。

3 研究の仮説

【仮説①】Good Listener 及び Good Speaker を育成することで、相互の対話が活性化するであろう。

【仮説②】毎時間の授業の最初10分間を、コミュニケーションスキルを高めるための帯活動として設定すれば、対話活動を円滑に行うことができるであろう。

【仮説③】教科書の活用方法を工夫することで、本文の表現を必要な時に取り出して表現できるようになるであろう。

【仮説④】統合的学習活動を単発で終わらせないことで、生徒に改良の機会をより多く与え、達成感を感じる活動にできることがあるであろう。

4 実践内容

(1)聴き手を「お客様」にしないGood Listenerの育成

Show&Tell は周知の通り、自分が体験したこと、見たことを絵に描いたり物を見せたりして、それをみんなの前で発表するものである。この活動の良さは、自分の言葉で表現し、感情を込めて話をすることで、自然に楽しいやりとりが始まり、プレゼンの楽しみ方を肌で覚える練習ができ、自己表現が豊かになっていくということではないだろうか。つまり、「やりとり」は必要不可欠なのである。

しかし我々日本人は、誰かが話をしているときは、「黙って最後まで目を見て話を聞く」ように指導されてきている。そこでまずは、Good Listener として目指す姿を明確にした。

そして、生徒の実態から必要な手立てを考え、授業はじめの数分をスキルアップのための時間とした。

○ Good Listener としての Communication 行動目標

Lv.1:目を向ける…Look (発表者を見て聞く)

Lv.2:イエス・ノー…Yes / No (問い合わせに、Yes/Noで答える
反応する…Respond (発話に対してあいづちをうつ)

Lv.3:表す…Express (分からぬ時 I don't understand.と言う)
述べる…Remark (話に対して、簡単な感想を述べる)

Lv.4:尋ねる…Ask (分からぬ部分を発表者に聞き返す)
コントロールする…Control (声の大きさやわかりやすさ
について, Could you speak up?などを使って指示する)

Lv.5:止める…Interrupt (話が理解できない時に、説明を中断
させて説明を求める)

関わる…Interact (問い合わせに対し積極的に応答を返す)
盛り上げる…Activate (話題に関して、関連質問をして
話を活発にする)

(2)聴き手を巻きこんだ発表ができる

Good Speakerの育成

話し手そのものが楽しいと感じられる内容でなければ、聞き手を巻きこむような発表にはなりにくい。つまり、Show&Tell のテーマを何に設定するか、が非常に重要であると考える。例えば1年生の自己紹介では「なりきり自己紹介をしよう」、2年生の行きたい場所紹介では「行ってみたい！ My Dream Island」、3年生の思い出紹介では「今だから言える思い出紹介！」など、生徒が楽しみながら Creative に表現できるよう工夫した。

また、Speaker としての Communication 行動目標も次のように設定した。

○ Good Speaker としての Communication 行動目標

Lv.1:語る…Talk (原稿ではなく、聴衆を見て話す)

Lv.2:見せる…Show (聞き手が知らない言葉は絵やジェスチャーなどを用いて伝える)

確かめる…Check (OK?など、聞き手の理解を確かめる)

Lv.3:説明する…Explain (聞き手が理解できていなければ丁寧に説明する。説明で困った時は、教師に言い換えの援助を求める)

聞かせる…Deliver (重要な部分をゆっくり大きく話す、必要なら繰り返し聞かせる)

Lv.4:関わる…Interact (相互にやりとりしながら話を進める)

尋ねる…Ask (聞き手に問い合わせ返事を求める)

Lv.5:言い換える…Paraphrase (聞き手が知らない言葉は、英語で簡単な語に言い換えて伝える)

(3)スキルを育成するための帯活動

① J-E Card

日常生活に近い場面を想定してコミュニケーション活動を行うとき、文法の習得や語彙、表現の暗記だけでは対話は成立しにくい。特に1年生では、分からぬことについて不理解を表明したり、聞き返すなどコミュニケーション方略についての指導が大切である。J-E Card は、対話場面で活用させたいこれらの表現をペアで練習するものである。ペアが言った日本語をもう一方が英語で表現することで、対話中必要となる表現を習得することを目指した。それまで、相手の言うことが分からないと、分からぬ自分が悪いのだ、と対話の継続をあきらめてしまう生徒が多かったが、これにより少しでも相手の意図をくみ取ろうとする姿勢が育ってきた。また、対話活動そのもので必要となる表現も練習に取り入れることも有効であった。

② Active Listening

あらかじめ用意された表現を対話中に使用したり、簡単な感想を述べることはできても、内容に関する質問をすることはなかなか難しいことである。Active Listening は、対話活動でより相互理解を深められるよう、Follow-up Question をできるだけたくさん行う練習である。教師が事前に用意した小話を聞いてできるだけたくさんの質問をする活動をおこない、活動後は、どんな質問ができるか話し合う場面も設定した。

③ Q→A→A→Q

他者を巻きこみ、対話を継続させていくための練習がペアでの Q→A→A→Q である。教師があらかじ

め用意した Question で対話をスタートさせ(Q), もう一方の生徒が質問に答える(A)。ここで終わらないように一文付け加えさせ(A), 最後に相手に質問をする(Q)。こうして, 最初の(Q)に対して(A)(A)(Q)まで発話すれば, 対話は切れることなく継続していく。1年生から like や have などの動詞を使って3分間対話を継続させることができた。

④ Description

教師が示した英語について, 既習の語彙や文を駆使して英語で説明し合うペア活動である。対話の途中で言いたいことが言えなくなってしまった場面を想定した言い換えの練習と, お互いの理解を確かめ合いながら interactive に対話するための練習である。この活動は, ジェスチャーなしで英語のみを駆使することとした。

(4)教科書の内容をいつでも取り出せるための活動

①Reproductionまでもつていく教科書指導

教科書は生言語データが豊富に詰まっている。せっかく普段の授業で扱っているのだから, これをしっかりと生徒の頭の中に残し, その英文やルールなどマクロストラクチャーをほとんど無意識に取り出して使用できるようになることを目指したい。そこで本校では, Reproduction までもつていく教科書指導をおこなっている。これにより, コミュニケーション活動を支えるための基礎・基本を強化することを狙っている。

●ReproductionまでもつていくReading指導●

【閉本したまま】

①PC+KeywordsでOral Introduction

…概要把握を目的として, 簡単におこなう。

②内容に関する日本語でのQ&A …内容に関するQ&A。

③Flash Cardで新出語(句)の確認

…概要から意味を予測させることもできる。

④一文ずつ本文のRepeat

…文法事項のポイントなどもここでおさえる。

【開本】…音読

①Chorus Reading …大きな声でリズムを意識して読ませる。

②Individual Reading …リズムよく, なめらかに読ませる。

③Read and Look-up …意味のまとめりを考えて読ませる。

④Response Reading …教師やCDに続いて読ませる。

⑤Reproduction …ピクチャーカードを見て, 教科書本文のストーリーを再生する。

【ワークシート】

①Summaryを見て空欄を埋める

②T or F, Q&Aをおこなう

③本文Writingをおこなう

このように, 音→文字→語句→文という言語習得の過程を大切にし, 理解しやすくすることを目指した。

②聴き手を意識して本文を読むReading Show

Kellerman(1985)の U-shaped Development で主張されているとおり, 教科書本文の言語データ運用力を高めるためには, 繰り返しその本文に触れることが必要である。自主学習で触れさせることはその1つの例であるが, そのきっかけの1つとして, 学期に一度Reading Showを行っている。これは, 学習済みの単元の中から1ページを自由に選択させ, 声の大きさ, 速さ, イントネーション, 音の明瞭さなどに注意して聴き手を意識し, Productive に本文を読む活動である。

(5)活動を単発で終わらせない工夫(Task Repetition)

Bygate (1996)は, 同じタスクを繰り返すことによって, より適切な語彙選択につながると述べている。また, Bygate(2001)では, タスクの繰り返しによって, 複雑で流暢な発話を引き出すという研究報告がされている。タスク活動においては, 流暢さはもちろん, 言語の複雑さを高める工夫をすることが大切である。

それだけでなく, 繰り返しによって生徒のチャレンジ精神を刺激し, よい結果になることが多いのではないかだろうか。

学期に一度きりのコミュニケーション活動では, どうしても単発的活動になりやすく, 前回の活動で自己課題を発見しても, それを生かしきくことができないことが多い。コミュニケーション活動が効果を生むためには, 生徒がその日の目標を達成できたかどうかを確認し, それに基づいて改善していくステップを, 授業の中に入れる必要がある。かといって, 時間のかかる活動を何時間も設定するのは無理がある。

そこで, 三浦孝(2006)の研究を参考に, 自作ポスターや Picture Book を用いた積み上げ型活動を, 単元のまとめとなる統合的学習活動として実践してきた。積み上げ型活動とは, 通常1回分の Show&Tell やプレゼンテーションの内容を4回に分割し, 5~10分の所要時間で継続しておこなう活動を表す。これにより, 生徒の改良の機会を増やすとともに, 生徒にも教師にも活動の慣れを生み, 短時間でも密度の濃い活動をおこなうことができた。

●積み上げ型学習活動の意義●

- ア. 同じ活動の繰返しで, 事前説明の時間が節約できる。
- イ. 生徒が次回の見通しを持って工夫して臨むようになる。
- ウ. 教師がアクションリサーチ的に改良を加えられる。

(静岡大学教育学部研究報告, 三浦 2006)

5まとめ

(1)J-Eカードについて

R	In front of?
R	In front of.
S	Oh
R	You see?
S	I see.
R	Really?
S	Yes.
R	Do you understand?
S	Yes, I do.

スキルアップのための諸活動によって、様々な生徒のあらわしが見られた。左は、対話後にボイスレコーダーからおこした対話の内容

である。J-Eカードで練習した表現を用いて、聞き手に理解度を確かめている様子が分かる。

(2)Active Listeningについて

1 T	Do you play it every day? How many times?
2 speaker	Why does he like it? Why does he play it?
3 正	Why are they kind? Why is she like a flower? What flower is she?
4 ①	How old is she? Why does she play the violin?
5 正 T	Where did you go? Why did he go? Who are your students? Where is there?
6 ⑤	What color is his dog? Who is a man? How big is his dog?
7 正正 T	

Active Listeningを実施したことにより、聞き手が質問できる回数が次第に増え、対話が活発になった。左の生徒は、開始当初2回しか質問できなかつたが、

7回目になると12回質問できた。3年生全体で質問回数が約450%伸びた。

(3)Q→A→A→Qについて



QAAQによって、1年生でも慣れると、3分間で62文対話を継続するペアが出てくるなど、楽しみながら対話を継続させている姿が多く見られた。

左写真は3年生の様子、文は1年生の感想である。意欲的に活動に取り組んでい

る様子が見られた。

(4)Descriptionについて

- 国会議事堂を Japanese White House と言しかえをして良いと思った。

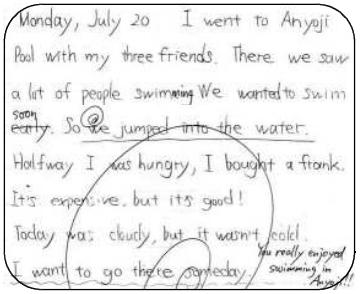
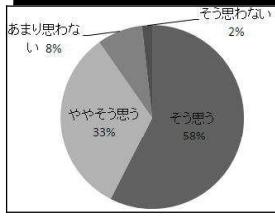


上は、対話中に伝わらなかった表現をうまく言い換えたことがわかる振り返りシートの記述(3年生)である。Descriptionの練習では、言い換えの練習だけではなく、分からぬ方が逆に質問することが有効である、と生徒の中で広がり、活発な練習となつた。

(5)教科書指導について

リプロダクションまでもつていく教科書指導は、本文を理解し、内容を身につける上で有効であると約

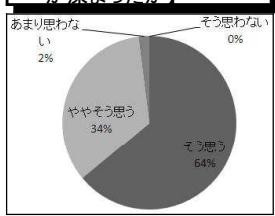
Q:【Reproductionは、教科書の内容を身につけるために有効であった】



90%の生徒が答えており、様々な活動で本文を有効利用する姿が見られた(2010年12月に無記名で、3年生で実施)。右上は、自主学習で生徒が書いた日記であるが、本文を参考にした表現を数か所で見ることができた。

(6)活動を積み上げ型学習したことについて

Q:【Show&Tellを4分割して積み上げることで、対話が深まつたか】



上の写真や左上の調査結果、及び下の生徒の感想からも分かる通り、ほとんどの生徒達は統合的学習活動における常設的学習活動に、楽しみながら参加することができた。それは、必要なスキルを身につけた上で活動に取組み、課題を明確にしながら次への活動に生かしていくというサイクルを明確に位置づけることができたからではないかと考える。

6 今後の課題

来年度から新学習指導要領施行となり、教科書も新たなものとなる。帶活動で学習する表現については、これまでの教科書との比較を行う中で、各学年に最も適切な表現を再確認する必要がある。さらに、学習者コーパスの有効活用をしながら、各学年で押さえておくべき表現を整理していく必要があると感じた。

統合的学習活動では、コミュニケーションを通じて他者との相互理解を深めようとする意欲、態度面が大変重要である。そのため、仲間など人とのかかわりを大切にし、自他の良さを互いに認め合える生徒を育成することが大前提となる。普段の授業から教師と生徒、生徒と生徒の間で良さを認め合いながら、今後も研究を深めていきたい。